



若者へのメッセージ 18

歌人 佐佐木幸綱

【第一回】不思議な言葉との出逢い

「嗚呼玉杯に花うけて 緑酒に月の影宿し……」。小学生の頃、徹底的に寮歌を歌わせられ、暗唱させられました。「玉杯」も「緑酒」も意味など分かりません。意味から切り離された不可解な言葉。私は不思議ワールドにつれてゆかれた気がしました。

うさぎ美味し(?)…ふるさと

石川啄木や北原白秋の名前は知っていても、じっさいの歌人を見たことがある人は少ないと思います。どんな人が、どんなきっかけで歌人になるのだろう、この一回目は、そんなことを書いてみようと思います。

キーワードは言葉です。

誰でも子供時代に、知らない言葉、不思議な言葉にであって、とまどったり、衝撃を受けた

りした経験があると思います。

たとえば、童謡「ふるさと」の最初を「うさぎ 美味し」と思い込んで、大人になるまで疑問に思っていた人は少なくないようです。倭万智はそうだったと言っています。古語を知らなければ、「うさぎ 追いし」だとは思ってもりません。当然のことですね。

私は「ゆらの塔」とはどんな塔か、高校生時代まで不思議に思っていました。「百人一首」に「由良の門を渡る船人……」という短歌があ



佐佐木 幸綱 (ささき・ゆきつな)

1938年(昭和13)、東京生まれ。66年、早稲田大学大学院文学研究科修士修了。河出書房「文藝」編集長、早稲田大学教授等を経て、現在、早稲田大学名誉教授。「心の花」主宰、日本芸術院会員、「朝日歌壇」選者、「東京歌壇」選者、現代歌人協会理事長。

これまでに、芸術選奨・文部大臣賞、紫綬褒章、現代短歌大賞、読売文学賞、現代歌人協会賞、遼空賞、若山牧水賞、斎藤茂吉短歌文学賞などを受賞。

■主な歌集

- 『群黎』(青土社)
- 『直立せよ一行の詩』(青土社)
- 『金色の獅子』(雁書館)
- 『百年の船』(角川書店)
- 『ムーンウォーク』(ながらみ書房)
- 『ほろほろとろとろ』(砂子屋書房)
- 主な著書
- 『佐佐木信綱』(桜楓社)
- 『柿本人麻呂ノート』(青土社)
- 『万葉集東歌』(東京新聞出版部)
- 『芭蕉の言葉』(淡交社)
- 『万葉集の(われ)』(角川書店)

ります。読み手が節をつけて「ユラノトオー」と読むのを聞くと、いつでもゆらゆら揺れている塔がどこかに存在するような気がして、どきどきしたものです。

私は小学校のときの担任の先生のおかげで、言葉に興味をもつようになりました。小学校三、四年生の間に、旧制高等学校の校歌や寮歌を徹底的におぼえさせられたのです。クラス全員（男子ばかりでした）、強制的にです。

私は戦後の混乱期に、東京の私立の小学校に入学しました。文部省の教育方針も教科書も混乱していた時代だったので、今考えれば先生も困っておられたのだらうと思います。今では考えられないことですが、毎朝、くりかえし私たちは一高から八高までの寮歌を歌わせられました。歌詞は先生がプリントを作って来られました。歌詞の意味や解釈にはまったく触れず、ただ歌わせられました。

たとえば「嗚呼玉杯に花うけて 緑酒に月の影宿し……」といった歌です。これは「一高寮歌」の冒頭部。一高（第一高等学校）は今の東大教養学部の前身です。「玉杯」も「緑酒」も小学生に分かるわけはありません。どの歌も意味はまったく分かりませんでした。しかし曲がついているのでおぼえやすい。十一番まである三高寮歌も、すっかり暗唱してしまいました。

意味から切り離された不可解な言葉。私は不思議ワールドにつれてゆかれた気がしました。ふだん使っている言葉では言えないことがあるらしい。おぼろにそんなことを直感しました。この幼年時のこの不思議体験が、私を短歌に誘ってくれたような気がします。

祖父・佐佐木信綱のこと

私の祖父・佐佐木信綱は歌人でした。

「ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲」という短歌で知っている人もいるでしょう。万葉集の研究者でもあり、横山大観らと一緒に文化勲章第一回の受章者でした。信綱は、逢った人だれにでも短歌を作らせました。こんなことを目撃したことがあります。写真を撮りにきた新聞社のカメラマンに「あなたは撮るのが仕事ですから写真を撮ってください。私は短歌を作らせるのが仕事ですから、まず、あなたが短歌を作って下さい」。カメラマンは困っていましたが、しかたなく短歌を作って信綱にみせました。信綱はその場で添削して彼に返し、写真を撮ってもらいました。

そんな人物ですから、孫たちにも短歌を作らせました。戦後の食糧難の時代です。褒美にもらせる菓子など甘いものにつられて、私も短歌を作らされました。

信綱には孫が二十人ほどいて、全員、短歌を作らされましたが、大人になっても短歌をつづけたのは私だけです。種を蒔かれても発芽したのは一人だけだったのですね。私だけ才能があったのではないと思います。日常の言葉で言えないことを言ってみよう。型式のある言葉だからこそ表現できる何かがあるはずだ。私だけ言葉に対する好奇心が強かったのだと思います。

このようなきっかけで短歌を作るようになりました。最初はそれほど熱心に作ったわけではありませんでした。が、「心の花」という短歌雑誌（明治三十一年に佐佐木信綱が創刊。現在も継続）に、短歌を発表するようになります。

信綱の短歌指導の根本は「おのがじし」でした。「各自それぞれに」「個人的に」といった意味です。言葉によって個性をどう見つけ、どう個性を作り上げてゆけばいいのか。

ハイパントあげ走りゆく吾の前
青きジャージーの敵いるばかり

高校までずっとスポーツ少年だった私は、ラグビーの短歌を作ったりしました。

意味がわからない不思議な言葉との出逢いは、言葉への興味をかき立ててくれました。もっと深く言葉とつきあってみたい、そんな気にさせられました。そんな心の用意があったから、短歌をつづけたのだらうと思います。